

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (73) 岡田 清治

姪の就職2

真三はさらに健太郎のメモに目を移した。

「目的喪失 見えない目標 一体、自分は記者として、人間として何をしようとしているのか。この問題にまだに苦しめられている。「これをやる」という目標が見つからず生きている目的が喪失しかねない状況である。一生を通じて仕事をすぐにつかめなくても、当面の目標を決めたい。心が充実するような仕事をせず、満足できる成果を上げられず、焦りと欲求不満がつる一方。以前のように朝のめざめがすつきりせず、頭の痛い日が続く悪循環で眠れない日があったり、早朝目覚めると、もう眠れなかつたりする。これはどうすればいいのかわからない。気軽になることも必要だろう。」

「ただ、やはり自ら仕事を見つけていくしかない。その中から道は開けるのではないかと淡い期待である。もう一つ。結局、自分を甘やかしているということだ。不規則な仕事や付き合いを口実に地道な努力は後回しである。」

「これからは毎日、この部屋に少しでも長くいるようにしなければならぬ。情熱と地道な努力の積み重ね—これ以外にないだろう。」

「珈琲をお持ちします」

「お願いします」

「真三は店員に頼んだ後、裕美に話しかけた。」

「健太郎がメモで『情熱と地道な努力の積み重ね』と言っているのは、この年になって痛いほどわかります。彼が苦悩の末、この結論に到達したことは立派だとは思いますが…」

「能力より情熱と地道な努力の方が大事なんでしょうか」

「そこなんです。京都の企業に京セラがあります。聞かれたことがあるでしょう」

「社名だけは、知っています。何を造っているかは知りませんが…」

「そうですね。電子部品の企業ですから、使っているも見えないですね。日本は家電製品では韓国、台湾、中国に負けていますが、それらの国でつくる家電製品の重要な部品の多くは日本製です。ここがしっかりしている限り日本のモノづくりは健在だと思えます。」

「話が横道にそれましたが、その京セラの創業者が稲盛さんです。彼は人生の結果＝能力×情熱×フィロソフィーだと言っているのです。私もファミレスをやっていたころ、稲盛さんの著書はかなり読みました」

「稲盛さんといえば、日本航空を再建した経営者ですね」

「そうです。よくご存じですね」

「新聞で読んだ記憶があります」

「その稲盛さんが、人間の能力よりパッション(情熱)が勝つというのです。能力がある人は一般に情熱や努力が、能力のないと意識している人に比較して低いというのです。だから掛け算すると、能力が低い人が人生で勝利することが少なくないというのです」

「いやいや裕美さんの情熱はすごいですよ。さらに大事なことはフィロソフィー、つまり哲学です。これは企業人です。会社から会社への進む方向と、個人の取り組む方向、つまりフィロソフィーが同じでないと、力が減退します。家庭でもそれぞれの考えが違っていますと、ともすればバラバラになります。だからフィロソフィーが一番、重要だということになります」



【写真】森の木々も根っこで支えあっています(著者撮影)

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」「インド」「愛知県」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。 FAX: 0569-34-7971 メール: takamitsu@akai-shinbun.net



著者：岡田清治おかせいじ
一九四二年生まれ ジャーナリスト (編集プロダクションNET108代表) 著書に『高野山開創二百年 いっぱいさん行状記』『心の遺言』などは社員の全能を引き出せますか!『リヨンで見た虹』など多数

「そうですね。企業は集団で活動していますから理解できます。それが嫌だったら個人でやるしかないでしょうね。新聞記者の場合、そのあたりが難しいのでしょうか」

「他の職業と比較して、難しいでしょうね。例えば、原稿については編集方針が反対とまでいなくても、慎重あるいは消極的だったら記者はそのベクトル(方向)に合わせておこなう必要があります。仮に社の方針と真逆の記事を書くと、デスクにボツにされるか、修正を求められるでしょう」

「いろいろな場面で悩むことになるでしょうね」

「政治部の記者さんならやはり政府の方針に沿うことになりませんか」

「ただ、私は健太郎のメモを読んでいて、悩みの中にもほとんど経済的なことが出てこない点が、恵まれていると思えましたね」

「そうですね」

「それだけ激しい仕事をしている対価としては当然だろうと思っているのですが、私なんかは毎日の売り上げが一番の悩みでした。目標に到達しないと、この先、店をやっていくのか、眠れない夜もありました」

「そちらの方が切実ですよ」

「人それぞれ置かれた立場で悩みも違ってくるということでしょう。その悩みも時間の経過とともに変化し、あきらめにもなっていくます」

「若い時は悩んで当然なんだろうが、それを一人で抱え込むと追い詰められることになりませんか。このあたりが難しいのですが、やはり友人が大事かなと思えますね」

「確かに経験を積むといいますが、年をとりますと、カードがとれてくるようですよ」

「そうですね。私はいろんな本を読むことで悩みから解放されることも多いのではないかと思います」

「なるほど…」

「真三はメモの続きを読んだ。」

「大学生の彼女」

「偶然の出会いから十八歳も年下の彼女との関係に苦しみ、現在も悩んでいる。迷い、悩んでいる多感な若い女性の姿が目の前に浮かぶ。インド在住のS坊さんのことは本当のところよくわからないが、彼のもとで暮らすことを決断したと言いつつ、私への愛も告白する。恋愛感情だけから、いわば妹を思うような気持ちが芽生え、かなり気分が楽になった。しかし、もしインドから帰ってきたらどうなるか…」

「地下鉄で友人Mと会う。「大学を出るとき、先生から言われたよ。『新聞記者は四〇歳過ぎてから悩むぞ』とね。その通りやね。仕事は面白い。夢中になる。気が付いてみると、しかし、自分のものがない。何をするといいか。何がないわけや。苦しいよ。その点、学者はいい。会社での個人はバラバラで、何をやっているかわからないが、新聞社はやっているんだよね」

ある日、竹葉亭でウナギを食いながら友人Kと話す。「何をするといいか」「何がないんやね。何をしたいかわからんわけや。そうすると、とりあえず、社会行政ルートにのって、一定の上昇をはかるのが一番楽やということになるね。ただ、その先はどうなるかわからん」

「仕事への切迫感」

「どんな持ち場、職場でも攻め手はあるし、得られるものもある。デスクワークならそれなりの、あるいは他では得られないような人間の深層に触れることもあるかもしれない。」

「〇君のこの見よ。宣伝から資料に回されたが、そこでも腐らなかつた。」

「唯我独尊」

「社会部で一番評判が悪い」とH氏が面と向かっていう。「それは、それは」と思ってしまう。つまり、そういうわけのほど、個性的なものを持っているわけでも、独自線もない。勝手なものという以外にはないか。ならば、ここで開き直って社会で認められるほどの仕事をしなければならぬと思うのである。自分のアイデンティティーは会社の仕事と生きている。」

「真三は健太郎の悩みはとくに目新しいことではないと思った。就職して、あるいは独立して働いている限り、人は大なり小なり悩むものである。時にはそれが仕事や会社のことだったり、家庭や子どものことだったりするが、人間は悩む動物である。だから宗教や哲学が生まれているのだが、それらをもってしても助けてもらうことはほとんどない。」

「落語や演劇で『間』を置くということが言われる。真三は思い悩むことに直面した時に、この『間』をおくことが肝要だとおもうようになっている。その間に相手の立場や、仮に思い通りに行かなかった時に、「ま、たいしたことがない」「これも宿命だな」と考えられる気持ちの余裕が出てくれば、かなり楽になることはこれまでの経験から言えると思っている。」

「それと決してあせって結論を出さないことである。時間が経つことで解決の糸口が見つかることがあるし、気持ちも楽になると考えている。」

「健太郎の悩みは、よほどの親友でないと思えないし、まともに受け取ってもらえないだろうと真三は思う。」

「裕美さんもそう思いませんか」

「そうですね」

「人間の人間という字はお互いの間を支えあっているという意味です。人は決して一人では生きていけないのです。支えがとれると、孤独になって自殺することもあり得るのです。だから夫婦や恋人は互いに支えあっているから成り立っているのです。これが離婚などしてバラバラになると、それぞれが支えとなる人を求めるのが普通です。健太郎も支えがほしかったのだと思います。それが兄弟や両親ではダメだったということでしょう」

「老人の孤独死も増えていますね」

「裕美さんもこの先、長いのですから支えを見つけてください」

絵手紙 第二集



絵文 縦山善久

返文 小林玲子

縦山善久

昭和十一年碧南市で生まれる。丸栄陶業株式会社代表取締役。碧南商工会議所会頭。愛知県陶器瓦工業組合理事長。全国陶器瓦工業組合連合会理事長などを歴任。平成十三年藍綬褒章受賞。平成二十二年旭日小授章受賞。丸栄陶業株式会社取締役会長 現在に至る。京都造形芸術大学・通信教育部芸術学部美術科・洋画コース大学院修士課程卒業。

小林玲子

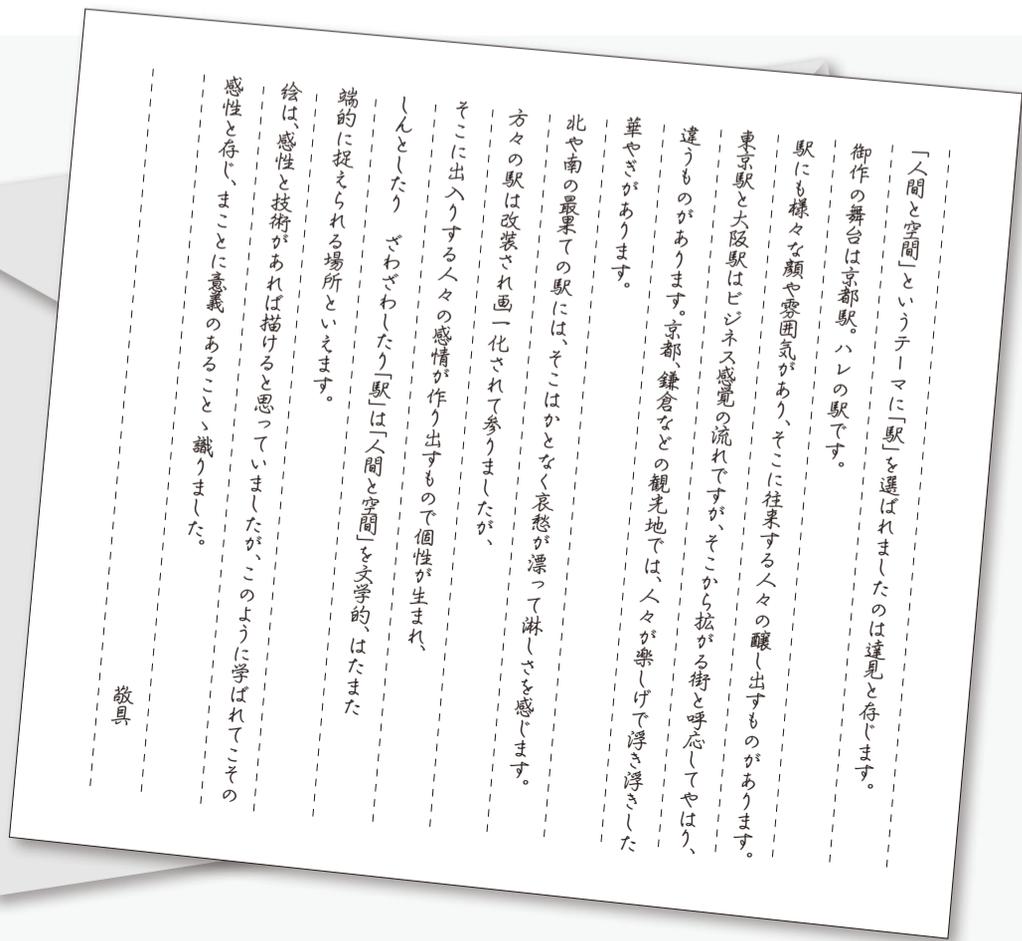
碧南市に育つ。西尾市在住。共著「西尾の民話」童話「サケの子ピッチ」随筆「海辺のそよ風」(中経コラム「閑人帳」より)ミュージカル脚本「みぐりちゃんのおうち」ほか童話集「タアタとバアバのたんけんたい」



油彩で描く京都駅「帰る人、来る人」

京若葉
連休前の
人の波

連休前の1週間、造形大のスクーリング科目「人物と空間」を受講しました。「人」もモチーフにしたいテーマを与えられ、初日は街中に出る人がたむろする場所を写真やスケッチ取材等として構想をまとめました。教室に戻ってから、油彩を基に鉛筆でデッサンで構図を決め、下絵を30センチの画用紙に、アクリル絵具で制作しました。後半は油彩で下30センチキャンバスに、二日半かけて作品を完成させました。独自の画面空間を探るということが、有意義でした。



敬具

「人間と空間」というテーマに「駅」を選ばれたのは遠見と存じます。御作の舞台は京都駅。ハレの駅です。駅にも様々な顔や雰囲気があり、そこに往來する人々の醸し出すものがあります。東京駅と大阪駅はビジネス感覚の流れですが、そこから広がる街と呼吸してやほり、違うものがあります。京都、鎌倉などの観光地では、人々が楽しんで浮き浮きした華やかがあります。北や南の最果ての駅には、そこはかとなく哀愁が漂って淋しさを感じます。方々の駅は改装され画一化されて参りましたが、そこに出入りする人々の感情が作り出すもので個性が生まれんとしたり、ざわざわしたり「駅」は「人間と空間」を文学的、はたまた端的に捉えられる場所といえます。

絵は、感性と技術があれば描けると思っていました。このように学ばれてこそ、感性と存し、まことに意義のあること、識りました。

知多の動植物雑記(三四四)

原 穰

寒い寒い冬の最中であらうと、暑い暑い真夏日の中であらうと、年がら年中、玄関先や庭には、パンジー、サクラソウ、ヒヤシンス、コスモスなどが鉢植えされ



四季を通して美しい木々や花々

なから、きれいな鉢植えだなんて、ゆとりを持つ時間のなかつただろうなと思うことしきりである。

な、一度お目に掛りたい。そして一か月も過ぎた頃偶然ながら通りかかれば、一人の女性が、鉢植えや庭木に水をかけている。

ちよっとおじやまします スポーツ吹矢常滑翼支部 畑中 政宏さん. Includes a photo of a group of people and text about a shooting club.

ちたの哲学散歩道 Vol.2

久田健吉 「谷川徹三の思想②」

谷川徹三が問題にした「文化的無地盤性」について少し詳しく説明します。前号で「日本軍国主義に抗しつつ文化的無地盤性克服に努力した谷川徹三」と書きました。

当時、「和魂洋才」の語が広く流布していました。「心はわが国固有の精神で、生産は西洋の技術で」というものです。

「文化的無地盤性」とはこの事をいうのです。西洋の機械文明・技術文明は人びとの必要において生み出されてきたものです。

「文化的無地盤性」の『文化』とは西洋文明を指し、『無地盤性』とは地盤を失った状態を指します。日本では西洋文明がそれを育んだ地盤から引き離され勝手に使用されているというのです。

では、西洋文明(特に機械文明)を育んだ地盤とは何か。それは人びとを労働の苦痛から解放させるという思想だと谷川徹三は言っています。

この事を理解せずに西洋文明を勝手に使用すれば、西洋文明は儲けの手段にされ人間の労働からの苦痛の解放には役立たず、むしろ余計に苦痛を人間にもたらすことになるだろう。

西洋は「必要」において機械文明を発展させました。その必要は、労働における人間の苦痛からの解放という必要でした。

日本も「必要」においてこの西洋文明を輸入しましたが、しかしその必要は人間の解放ということを理解しない儲け主義の必要でした。

どうしたらこの文化的無地盤性を克服することができるのでしょうか。西洋文明の文化的地盤を深く学ぶと同時に、日本の文化を深く知って、日本の文化的地盤の上に開花させることができれば可能だと。

若竹俳壇

作品募集 毎月十日までに葉書で 発行所へ

- 揺れている夜目にも白き雪柳 碧眼の和食の修業木の芽和 進むともなき巨大船春の海...

- 吉田ひろし 齊藤 浩美 加藤 久子 杉江 民子 塚本 千鶴...

- 武豊町民会館 武豊町総合体育館 武豊町立図書館...

